住み続けられるまちづくりを
Sustainable Cities and Communities

Goal 11

大学の貢献

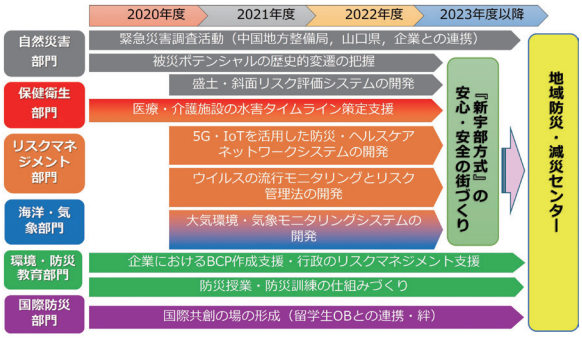
地域防災・減災センター

当センターは、少子高齢化が進んだ地方都市の防災対策、医療介護問題、そして感染症対策などの問題を連動して解消することを目指し、宇部市をモデルとして工学・医学・保健学・理学・教育学・社会学など多様な分野から検討し、持続可能な都市社会モデル「新・宇部方式」を提案します。

宇部市のような地方都市は、社会インフラの脆弱化と少子高齢化が同時進行しているところに、防災対策や医療介護問題、さらに新型コロナウィルスの新しいリスクに直面しています。一方で、人口密度の低さや豊かな自然環境はウィズコロナ社会において大きなアドバンテージになるともいえます。

そこで、本センターでは【自然災害】【保健衛生】【リスクマネジメント】【環境・防災教育】【国際防災】【海洋・気象】の６つの部門を設置し、上記のような特徴をもった都市の安全・安心を実現するため、次の６つの課題に取り組みます。

・医療・介護施設の水害タイムライン策定支援
・被災ポテンシャルの歴史的変遷の把握
・5G・IoTを活用した防災・ヘルスケアネットワークシステムの開発
・ヤマト運輸配送車を利用した大気環境・気象モニタリングシステムの開発
・劣化・崩壊・流出メカニズムを考慮した盛土・斜面リスク評価システムの開発
・ウイルスの流行モニタリングとリスク管理法の開発



デジタル触地図（国立民族学博物館触知案内板）
～国立民族学博物館、九州大学、山口大学との共同プロジェクト～

国立民族学博物館のデジタル触地図（国立民族学博物館触知案内板）が、国立民族学博物館の文化資源プロジェクトにより開発されました。本プロジェクトのメンバーである九州大学大学院芸術工学研究院の平井康之教授、山口大学国際総合科学部の冨本浩一郎講師が主導してデザインしました

デジタル触地図は、視覚に障がいのある人とない人が、分け隔てなく館内情報にアクセスできるインタラクティブな触地図システムです。タッチパネルディスプレイ上に設置したフィンガーガイドと音声案内との連動によって、館内の位置情報や展示案内を触覚と聴覚から得ることができます。フィンガーガイドは、今回新たに開発された、なぞりながら触る行為を促す新しいインターフェイスデザインです。標準デザイン化を目的として特許を取得し、他の博物館園への公開と普及も目指しています。

そして、2020年度グッドデザイン賞（日本デザイン振興会）、IAUD国際デザイン賞2020 銀賞 公共空間デザイン部門 （国際ユニヴァーサルデザイン協議会）に続き、UNIVERSAL DESIGN competition 2021（主催：IUD（Institute for Universal Design）、ドイツ)において、UNIVERSAL DESIGN expert 2021（専門家賞）及びUNIVERSAL DESIGN consumer 2021（消費者賞）をダブル受賞するなど、このデジタル触地図は国内にとどまらず、海外においても評価されています。

山口学研究

「山口学」は、山口県の持つ歴史、文化、自然、環境、産業など様々な地域の特性や課題について、文理融合の視点で検証・研究し再発見するために構築された山口大学独自の学際的な研究です。

山口学研究センターは、地域社会・行政・大学が協働して、山口県の謎を解き明かすプロジェクトを推進することで、地域の持つ魅力を再発見することや、地域が抱える課題の解決に貢献するなど、山口県に関する研究を推進するとともに、その成果を活用し、地域社会の活性化に寄与することを目的としています。2023年３月13日、2022年度採択のプロジェクトの報告会を行いました。

プロジェクト名	プロジェクト代表者
古代テクノポリス山口 －その解明と地域資産創出を目指して－	人文学部 客員教授 田中　晋作
山口炭田地域における居住の持続・縮退に関する研究：美祢市・宇部市・山陽小野田市を対象として	創成科学研究科（工学系学域）准教授 白石　レイ
阿東地福地区における地域包括ケアの展開－中山間地域の暮らしを繋ぐ要因分析－	経済学部 教授 鍋山　祥子
新型コロナウイルス感染症に関連する緊急経済対策が山口県の中小企業経営に与える影響の定量分析	経済学部 准教授 諏訪　竜夫
山口食²プロジェクト	創成科学研究科（農学系学域）教授 赤壁 善彦
障害者の学校卒業後のキャリア発達支援と馬関連産業を通した生涯学習支援に資する学習プログラムの開発	共同獣医学部 教授 佐々木直樹